

防災歳時記 (57)

—海の水がせめて来た—

(伊勢湾台風から 50 年)

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤清治

フナムシが家の中に入って来た

1959(昭和 34)年 9 月 26 日夜、紀伊半島の潮岬付近に上陸した伊勢湾台風は、名古屋市のすぐ西を通ったので、名古屋から四日市にかけて最高潮位 39m(東京湾平均海面上)の高潮が襲った。海岸堤防が各所で破られ、死者・行方不明者 5,098 名、住家の全半壊・浸水など 120 万戸をだした。

台風が紀伊半島に上陸する前日、熊野灘に面した小学生がこんな作文をつづった。

「せまい小さなあなから、フナムシ(船虫)がアリのようにちらばっていく。それが全部家の中へ中へと入ってくる。ふしぎだと思って見ていた。

あくる日(26日)になって、ラジオは台風が来るとしらせた。ジェット機のような雨が、まっ白に、空から地面にたたきつけた。

海の上では、波が兵隊のように、おきからボクたちの陸へ陸へとせめてくる。

夜になって、風が強く、うらの戸がゆみのようにまがる。ボクは、ここで考えた。

『フナムシが家の中へ入って来たのは、台風が来るからだだったのだな。きっとそうだ。フナムシの頭のところに、無線がついて

いるのかな』と、思った。

そんなことを考えているまに、風がきつくなり、波のあたる音がドシンドシんとひびいてくる。早く朝にならないかなあ。

父ちゃんは船が心配で、海の方ばかり見ている。父ちゃんが、『あ、海の水が来た。』とさげんだ。海の水は、たくさんのものをいっばいのせてボクたちの家にせめて来た。

父ちゃんは歯をくいしばって、水をくい



写真 1 伊良湖岬灯台 (伊勢湾の入り口)

とめていたが、水の力に負けて、ゴボ、ゴボと水がはいりだした。」(三重県北牟婁郡島勝小学校5年脇一男)

海辺の嫌われ者・フナムシが台風襲来を予知する能力があるかどうかわからない。

地震の前に動物が騒いだり、姿を消したりという話はよく聞く。子どもたちが動物の異常行動を見たまに観察することは頼もしい。

流木が多くの人を吸い込んだ

「名古屋では26日夜7時ごろから風雨がだんだんひどくなった。外で音がしたのでお父さんが戸をあけると、ろうかまで水がおしよせてきた。水はゴボゴボとふえるばかり。

外は、ゴーゴーと音がして流木がドカンドカんとぶつかって家がゆれる。

『おーい、たすけてくれ』という声があちこちから聞こえる。家の前には2階の高さまで流木が重なり、これに吸い込まれて多くの人が死んだ。1軒おいて、となりの家は6人家族だったが、おばあさんひとりがのこって、おじさんもこどもみな水死した。

『お父さんは私たちをだいて流された。しずんだとき、思わず妹につかまっていた手をはなしてしまった。ボクは流木につかまって助かったが、父や母を呼んだが返事はなかった』という話は悲しい。

台風は本当にこわいものだ。」(名古屋市南区白水小学校5年無津呂達夫の作文)白水小学校の校庭に建てられた「友情の碑」の碑文に次のようにある。



写真2 友情の碑(名古屋市立白水小学校)

「9月26日午後9時ごろから、この地を襲った台風15号(伊勢湾台風)の中心気圧945hPa、最大瞬間風速46m/s、折からの満潮時と重なって、海水がふくれあがり、高潮となって押し寄せて来た。

またたくまに水位も2m以上、この台座の高さまであがり、人も家ものみ込んでしまった。名古屋港から流出した巨木は、この運動場を埋めつくし、殉難者は学区民861名、そのうち本校児童142名を数える未曾有の大災害となった。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、二度とこの惨禍をくり返さないことを誓いたいと思う。」碑をみると、お母さんが一人の子を手でかかえ、もう一人を背負って、必死になって助けようとしている。

「昭和の三大台風」のひとつの「伊勢湾台風」が来てから、今年50年の節目にあたる。当時子どもたちの作文に耳をすましたい。悲惨な体験を風化させないことこそ、防災の第一歩だ。